

TOKYO PAPER

ト キ ョ ー ペ ー パ ー

for Culture

フ ォ ー カ ル チ ャ ー

“東京の文化を研究する”をモットーに昨年創刊した『TOKYO PAPER for Culture』。みなさんにとって東京とはどんな街ですか？この街と自分、どんな関係を築けていますか？どんなところが好きですか？嫌いですか？その答えひとつひとつが、日々、私たちの研究材料になっています。第四号も、東京文化発信プロジェクト（ブンブロ）を拠点にしながら、様々な街を歩き、人に会って語らい、そこで得た実感を紙面で発表しています。何かひとつでも、“東京とわたし”の関係を深めるきっかけが転がっていますように！

Founded last year, the “TOKYO PAPER for Culture” is a forum for investigating the culture of Tokyo. What kind of city is Tokyo for you? What relationships do you build with the city? What do you like about it? Dislike? Your answers are the fuel for our daily research. In this fourth issue, we present our impressions from meeting and talking with people while walking around different neighborhoods for Tokyo Culture Creation Project events. We hope you find a thing or two scattered here that triggers a deepening of your relationship with Tokyo!

第四号／004

東京のあかつき

この街の、自分の居場所

六本木、暗闇と路地裏に見る夢

田名網敬一（アーティスト）× 幅 允孝（ブックディレクター）× 坂本美雨（ミュージシャン）

研究テーマ④：

アートを通じて、子供たちの感性をひらく



六本木、 暗闇と路地裏に見る夢

大都市・東京を象徴する街のひとつ、六本木。

ブンプロのひとつ「六本木アートナイト」の開催地でもあるこの街から、東京文化を見つめたい。

そんな想いに応えてくれた今回の“客員研究員”は、六本木と縁の深い田名網敬一さん（アーティスト）、幅 允孝さん（ブックディレクター）、坂本美雨さん（ミュージシャン）です！

Roppongi is one of those places that seems to symbolize metropolitan Tokyo.

For this issue we decided to take a look at Tokyo culture by zeroing in on the neighborhood,

site of Roppongi Art Night, with the help of three “guest researchers”

who know the area well: artist Keiichi Tanaami,

book director Yoshitaka Haba and musician Miu Sakamoto.

Keiichi Tanaami

Miu Sakamoto

Yoshitaka Haba



はじまりは、六本木上空から。快晴の東京全景を眺めた後は、六本木交差点界隈をぶらり散策。

実はこの街で青春時代を過ごしていた田名網さん。

初勤務地が青山ブックセンター六本木店、

自身の現在の活動原点がここにある幅さん。

そして公私ともに訪れる機会が多い坂本さん。

そんな背景を持つお三方は、

それぞれこの街への想いを胸にしながら、座談会へ。

話題はまず“闇”のことからはじまりました。

田名網敬一（以下、田名網）：京都の大学（京都造形芸術大学）で教鞭を取るようになって、京都に通い出してから、自ずと東京と京都を対比して見るようになっていました。そこで色々違いはあるけれど、一番感じたことは、闇なんですよ。

幅 允孝（以下、幅）：東京は明るいですから、その分、京都で闇を感じられたのでしょうか。

田名網：僕が青春時代に六本木でよく遊んでいた頃は、街全体が闇に包まれていたんですよ。今では想像できないけれど、自宅から盛り場に行くまでの道のりがずっと暗いから、盛り場の灯りが見えてくると、ほっとするくらい。当時は『ニコラス』という日本で初めてピザを紹介したお店があって、

そこにしょっちゅう通っていて。フランク・シナトラや石原裕次郎が来るような店なんだけど、周辺は平屋の民家が並んでいるだけで真っ暗闇だから、『ニコラス』だけが不夜城のように明るかった。六本木と言えばその印象が強く残っています。ところが今の東京は、マンションの1階に飲み屋さんがあったりもする。だから東京の街全体が、そういう闇の通路が少なくなっている。また僕は人間の想像力や思考力というのは、闇が一番掻き立ててくれると思っているから、昔に比べて今の人は、想像力も鈍くなってきているんじゃないかな。

幅：闇のお話でいうと、社会全体がいろんな意味で明るい暗い、その両極になっていて、それぞれに対してあまり奥行きや幅を感じることができなくなってきている気がします。谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』の中で、漆器の闇についての話が出てくるんです。漆の暗い底の方に、器の色に溶け込んだ液体が澱んでいるのを眺めたときの気持ちが書かれていて。要は暗いからこそ、見えてくるものがあるということですね。

坂本美雨（以下、坂本）：ふたりのお話を伺っていて、ちょっと逸れてしまうかもしれませんが、私は六本木のTSUTAYA（TSUTAYA TOKYO ROPPONGI）側から、麻布十番までの街並みがすごく好きなんです。麻布十番商店街には、古いお店も立ち並んでいて、昔から住んでいる方も多いですね。そしてその商店街を抜けると、すぐ近くに六本木ヒルズがあるじゃないですか。商店街から見る風景の中に六本木ヒルズが存在が、今はもう溶け込んでいる。その、古い街並からあまり境目なくぬると、都会に足を踏み入れられる感覚が、東京らしいなあと。麻布十番商店街の近くに父方のお墓があるので、よくお墓参りに来ているんですけど、そこは都会の喧騒から離れていて、都会のデッドスポットみたいな感じ。とても静かで夕暮れがきれいなんですよ。

田名網：あの辺りはまだ路地もあって情緒的ですね。

幅：不思議なもので、暗闇坂（港区元麻布）の方へ向かうと、とても静かですよ。

Tanaami: I started teaching in Kyoto (the Kyoto University of Art and Design) and commuting there regularly, I began looking at Tokyo and Kyoto in comparison to each another. There are many differences, but the one that really stands out is the darkness.

Haba: Did Kyoto seem dark because of how brightly lit Tokyo is?

Tanaami: Back in my younger days when I spent a lot of time going out in Roppongi, the whole area was enveloped in darkness. The roads leading from home were all dark, so it was always a relief to see the lights of the entertainment area. In Tokyo today, though, you find bars on the first floor of condos, and dark alleyways are harder and harder to come by. I don't think anything stimulates human thinking and imagination as much as the dark; maybe that's why people nowadays aren't as perceptive as in the past.

Haba: Jun'ichiro Tanizaki's book *Inei raisan* [In Praise of Shadows] includes a discussion of black lacquer in which he talks about his feelings when looking into the dark depths of a cloudy soup at the bottom of a lacquer bowl. The idea is that there are some things that can only be seen in darkness.

Sakamoto: I like the area between the Tsutaya side of Roppongi and Azabujuban. The Azabujuban shopping district has lots of old shops and many of the residents have been in the area a long time. And when you've passed through the shopping district heading toward Tsutaya you're practically at Roppongi Hills, right? Today, Roppongi Hills blends in as just another part of the view seen from the shopping district. The way you can slip from an old townscape into the modern city without a sense of boundary crossing seems very Tokyo-like to me. I often visit my paternal family's gravesite located near the Azabujuban shopping district. It feels completely cut off from the bustle of the city, a kind of dead space where one can enjoy the quiet beauty of a sunset.

Tanaami: That's a really atmospheric area where you can still find little alleys and side streets.

Haba: Strangely enough, things get very quiet in



Roppongi, Dreaming in the back alleys and darkness



坂本：「静か」は、音のお話にも繋がりますけど、東京は無意識に耳に入ってくる音がすごく多いですね。そしてその音に対して、私たちの身体は鈍感になっている。逆に言うとなすべての音が入ってきてしまったら、心がパンクしてしまいそう。だからある種、体が進化しているというか、入らないように鈍感になっているとも言えるかもしれません。

幅：「関係ない」と、通り抜ける技術みたいなものが、いつの間にか勝手に身に付いてしまったのかもしれないですね。

坂本：私自身、音楽を作るときにいつも想うのは、本当に肌触りの良い音を、身体が吸い込んで気持ち良い音を作りたいということなんです。同時にそれは自分の音楽に限らず、純粋に気持ち良い音を体感できる場所が、東京にもっと増えて欲しいと思います。特に子供たちが、「本当に良い声。良い音。それってどんな音だろう?」ということが体感できる場所が必要じゃないかなって。それはコンサートホールでも良いですけど、やっぱり日常的には行きづらい場所ではあると思うので、そういう音を試せる、聴くことができる広場があれば面白いですね。

文化に対して容赦なき場所

幅：京都には色んな要素をそぎ落として、余白を作って、余韻を感じさせる“文化”があるとしたら、恐らく東京、それも特に六本木はどんどん重ねていく“スーパーノイズの文化”な部分があると思うんです。でもそれはそれですごく面白いというか、可能性を感じる場所があります。

田名網：相対的なものだからね。京都に通い、京都の文化の厚みを知ったことで、逆に東京のことも好きになりましたよ。

幅：最近、年を取ったせいか、六本木交差点に立っていると、色んな客引きに合うんです。そういう状況になって考えてみると、六本木交差点は、要はアートやデザイン、音楽といった、そういう文化に対して最もアウェー感が強い場所なんですよ。でも本当は、その文化に対して容赦のない場所に対してこそ、通用するものでなければならない。それを自分の仕事に置き換えたとき、例えば『木村伊兵衛のバリ』という本を持って、洒落たお店に通うようなお客さんに見せたら、「木村伊兵衛、最高だよ」「これ再販したんだ」とか、そういう反応を示してくれるんです。一方でそういう文脈が全く通用しない、リハビリ専門の病院にいる患者さんに見せると、実際に仕事で見せたことがあるんですが、患者さんは誰一人、木村伊兵衛を知りません。でもあるおばあちゃんは「ええ写真だね。もう一度足を治して、バリ行かなあかん」と、言ってくれました。そういうことが本来大切だと思っていて。つまり写真の力が本物であれば、誰が見てもグッとくる部分が必ずあるはずなんです。文化だなんだと言って、高い場所にとどまっていはいけなくて。客引きのお兄ちゃんがぐっとくる仕事をしていきたいと個人的には思っています。

坂本：どんな表現でもそうですね。すごくよくわかります。

幅：文化に対して容赦のない場所でもちゃんと通じる提案という意味では、あの六本木交差点で通じたら、きっと世界中のどこでも通じるような……、つまり一番文化を感じてもらうにあたっての圧倒的な容赦のなさが、六本木交差点に

はある。僕はそれが面白い気がしています。きっと客引きの方も「1時間の間に、何人呼び込まなきゃいけない」とか、自分のことに必死ですよ。そういう方たちが例えば1枚の絵を観る、本を読む、音楽を聴いて、「はっ」と、何かを感じ取ってくれたら、本当の意味で六本木を文化の街と呼んでいいのではないかと思います。道のりはある程度長いですが。

孤独は都会の贅沢品

田名網：さっき、「路地」という言葉を口にしたけれど、今、六本木に限らず、銀座やほかの街も、大きなビルがどんどん建つことで、路地がなくなってきているでしょう。本来路地の役割は、そこで小用を足したり、喧嘩した男女がこそこそ仲直りしたり、別れ話をしたりね、そういう路地ならではの人間の営みがあるわけでしょう。

——一同笑。

田名網：もう迷路みたいに細い路地があると、ドキドキしますよね。あの楽しさというのは、人間が根源的に持っている何かに訴えかけるものがある。でも今はいろんな街でメインストリートと、あとはちょっとした裏道があるだけに変化してしまった。つまり街に情緒がなくなってきている。日本には四季があるから、それによって日本人の独特の感性が生まれているわけですけど、これでもし四季がなかったら、日本人はもっとどうもう獺猛な民族になっていたはずですよ。僕はね、路地というものは、この四季と同じような役割を果たしていると思うんです。もしも区画整理された大きな道だけで街が成り立ってしまったら、人間の資質は相当変わってくるはず。殺人事件も増えているし、闘争的な人間が多くなる。

幅：そうですね。だから例えばスマホの地図アプリを使っても、決してたどり着けない場所みたいなものがあるってほしいですね。今はとにかく情報があふれすぎて、調べれば何でもわかっ



Azabu when you head toward Kurayami-zaka.

Sakamoto: Speaking of quiet, in Tokyo we're subjected to such an incredible number of sounds that we aren't even aware of hearing many of them. Put another way, if we were to process everything that we heard we'd probably go mad. In a sense, you might say we've evolved to become less sensitive, to shut things out.

Haba: I suppose somewhere along the way we mastered the art of tuning things out, of letting them pass as being of no concern.

Sakamoto: When I compose music I always make a conscious effort to create sounds that have a pleasant texture the body can absorb, that make the listener feel good. At the same time, I wish there were more places in Tokyo where it was possible to listen to genuinely pleasant sounds, even if it isn't my music. I especially think it's important that children have

places where they can experience and understand what makes a really good sounds or a really good voice. Concert halls are fine, but they aren't the sort of places you can visit every day. I wish there was a park or plaza where children could test out and listen to different sounds.

Haba: If the culture of Kyoto can be described as one of paring things down to the minimum, creating blank space and a sense of lingering reverberations, Tokyo—and especially Roppongi—is perhaps more a culture of multi-layered “super-noise.”

Tanaami: It's all relative, isn't it? Commuting to Kyoto and learning the depth of its culture has really rekindled my interest in Tokyo, too.

Haba: Perhaps it's a sign I'm getting old but lately when I stand at the Roppongi intersection I get approached by all sorts of touts. In situations like that I can't help but feel that the Roppongi intersection is

about as far away from the cultured worlds of art, design, and music as you could get. There ought to be something that is able to get across precisely because it is presented in such an unforgiving environment for culture. In the context of my own work, if I take a copy of *Kimura Ihei in Paris* and show it to the sort of people who frequent stylish shop, they say things like, “I love Ihei Kimura” or “So, they reprinted that.” On the other hand, if I show the same book to patients at a rehabilitation clinic who know nothing of the context—I've done this as part of my work—not a single one of them will have ever heard of Ihei Kimura. One older woman, though, did say, “Those sure are pretty pictures. Guess I'll have to go Paris once my leg's better.” This seemed terribly essential and important. If the photographs are really powerful, something is sure to register no matter who sees them.



お三方の胸元のロゼットは、客員研究員の証！それぞれの洋服にとっても映えています。

てしまうので、その分思考が停止してしまっている。僕は今の時代、「知る」ことと、「生きる」ことが断絶してきている気がするんです。要は自分の「記憶」もパソコンひとつあれば、それを「外部記憶」として委託できるから、昔のように“生き字引”と呼ばれるような人は、もう必要なくなったと思われちゃっている。けれど、結局のところこうして情報化が進んで、外部保存装置が増えていくことで、短いタームでのレスポンスを求められながら、代替可能な人間同士のコミュニケーションばかりが増えてしまったんじゃないかと。本当に人間が必要な情報って身体を用いて血肉化してゆくしかないはずなのに。それはあまりハッピーなことではない気がするんです。それに、どれだけSNSを利用して人と繋がっても、1日で会える人の数、直接語りかけられる言葉の数は限られている。例えば人が3m級の生き物になったりとかしたら別かもしれませんが、生物学的に、人間のサイズ感が決まったときから、ヒューマンスケールという程よい領分があるんじゃないかと。

坂本：その感覚よくわかります。ちょっと角度は違いますが、私も音楽を作るときに、自分の友達のために作っているようなところがあるんです。“ために”と言ってしまったら対象はすごく狭いですし、実際、小さい頃から“大衆性”というものに対しては、色々と感じていることもありますし、「ポップスをやるからには、それじゃいかん!」というのはありますが……。でも、それでも「歌いたい」という本当の動機は、今こうして皆さんとおしゃべりしていることと一緒に、もっと小さくて強いところにあるんです。そして私のこの気持ちは、きっと皆さんそれぞれに共通項として持っているに違いない。そう信じて作っているところがあって。

幅：1人に届かないものが1000人に届くわけがないというような話ですよ。でも本当に、親しい友達や家族、そういう代替不可能な人と自分の、本当に個人的な関係みたいなものから、もう一度、街が少しずつ塗り替えられていったらいいというイメージを僕は持っています。少なくともあのお店に行けば、あの人がいて、こういう言葉をかけてくれる。その感覚みたいなものを取り戻さないことには、街という装置の手の平の上でずっと踊らされてしまう。それでは自分の



根をちゃんと街に張れない気がします。色んな人と繋がりたいという不安はわかりますけど、結局人間は孤独なものです。

坂本：孤独でいること、孤独を感じることは、生きているってことですよ。孤独じゃないと絶対に見られないものがある。街でも青空でも、全く違って見えると思うので。

田名網：孤独をかみ締めるっていうのはいいじゃないですか。僕の作品もそうやって生まれますから。都市はどこも喧噪だからね、そういう時はひとり呑み屋のカウンターで熱燗呑むくらいがいい。孤独は贅沢ですよ。

幅：孤独は目の前の他者がいて、初めて生まれる感情ですよ。田舎のような大自然の中にいると、孤独とか感じないですから。都市市ならではの、最高の贅沢です!

研究結果のまとめ

日本の文化の特徴の一つに、詰め合わせの美学というものがあると思う。重箱やお弁当箱のような小宇宙が台所から生み出されるあれだ。そして、六本木には東京の魅力がお弁当箱のように詰め合わされていると考えてみたらどうだろうか。闇や路地裏の魔力も、六本木交差点の容赦なさも、人と人のつながりも、この街にはモザイクのように詰め合わされている。そんな風に見てみると、「六本木アートナイト」(P5)は様々なアートと街の食べ合わせを楽しみ深夜の重箱つつきというところか。朝焼けとともに味わう最後の一品はきっと一生ものの味わいになる。



幅 允孝 Yoshitaka Haba

1976年愛知生まれ。BACH代表。人と本がもうすこし上手く出会えるよう、様々な場所で本の提案をしている。著作に『幅書店の88冊』(マガジンハウス)、他にも『本の声を聴け ブックディレクター幅允孝の仕事』(著・高瀬毅／文藝春秋)が刊行中。

Born in Aichi in 1967. President of Bach, Ltd., Haba makes book proposals in a variety of forums to help people and books connect a little easier. Publications include *Haba shoten no 88-satsu* [88 Titles from the Haba Book Store]. Also available is *Hon no koe o kike: book director haba yoshitaka no shigoto* [Listen to the Book: The Work of Yoshitaka Haba] by Tsuyoshi Takase

坂本美雨 Miu Sakamoto

1980年東京生まれ。音楽活動と並行して、舞台出演、ナレーション、エッセイや映画評などの執筆活動、TOKYO FM系JFN38局「ディアフレンズ」(月～木／11:00-11:30)のパーソナリティを担当。現在、ニューアルバム『Waving Flags』が発売中。

Born in Tokyo in 1980. In addition to her musical activities, Sakamoto perform on stage, narrates, writes essays and movie reviews, and serves as a radio personality on Dear Friends, a program aired Mondays to Thursdays from 11:00 to 11:30 on Tokyo FM JFN 38. Her latest album is titled “Waving Flags”.

田名網敬一 Keiichi Tanaami

1936年東京生まれ。京都造形芸術大学教授。60年代からメディアやジャンルの境界を横断して精力的な創作活動を展開し、日本におけるサイケデリックアート、ポップアートの先駆けとして知られる。世界中のギャラリー、美術館、映画祭等で作品を発表。

Born in Tokyo in 1936. A professor at the Kyoto University of Art and Design, Tanaami has pursued cross-media, cross-genre creative activities since the 1960s and is known as a pioneer of psychedelic art and pop art in Japan. His work is presented at galleries, museums, and film festivals around the world.

Sakamoto: That’s true of any kind of creative expression, isn’t it?

Haba: A proposal that registers at Roppongi intersection can probably make it anywhere in the world. I mean, that has to be about the least forgiving place there is for feeling a sense of culture. and I think we’ll only be able to call Roppongi a cultured neighborhood in its true sense when having people like that look at a painting, or read a book, or listen to music causes them to catch their breath and really feel something.

Tanaami: I was talking about alleys before and with all the huge buildings now going up .I suppose such side streets are disappearing. The real role of back alleys, of course, is as a place for the sorts of human interaction that could happen nowhere else: a couple breaking up, or maybe patching things up after a fight. Mazes of narrow alleyways make the heart race. They appeal to something fundamental about the human condition. So many neighborhoods today, though, are made up of just a main street and a few side streets. There’s no atmosphere anymore. The character of the Japanese people was cultivated by the four seasons, and without them we would surely have grown more fierce. I think alleyways play the same role as the four seasons. If we rezone our neighborhoods so that they’re made up of big roads alone, I think it will change people’s temperament.

Haba: I agree. We need to have places that are all but impossible to find even when following the directions on a smartphone map. These days it seems there’s a real disconnect between knowing and living. You can rely on your computer to act as a kind of external memory that replaces your own, and we no longer need the kind of people once called “walking encyclopedias.” With the advance of computerization and the proliferation of external storage devices, everyone now expects an immediate response. I think there’s been an increase in interpersonal communication that’s utterly perfunctory and interchangeable instead of irreplaceable. It’s not a very happy situation. And no matter how many people you’re connected with through SNS, there’s still a limit to how many people you can meet or words you can exchange directly in the course of a day.

Sakamoto: Coming at the issue from a slightly different angle, when I compose music I try to imagine I’m doing it for friends. That may sound a bit narrow in scope, and ever since I was little I’ve thought quite a bit about popularity and know this might not seem the right approach for pop music, but I still feel the real motivation for wanting to sing, like talking with you here now, must be something both smaller and more powerful.

Haba: But I really think it would be great if we could renew the city little by little based on these unique relationships we have with irreplaceable people like close friends and family. At the very least, if we can’t recover the sense of going a given shop and knowing that such-and-such a person will talk to us in a certain way, then I think we’ll never escape the sense of dancing to the tune played by the urban machine, and that’s no way to put down roots in a place. I understand the insecurity of wanting to be connected to lots of people, but we’re all alone at the end.

Sakamoto: There are so many things you can only see when you’re alone, too. The city, and the open sky, looks completely different.

Tanaami: And why not enjoy the taste of being alone? That’s certainly where my work is born. Being alone is a real luxury.

Haba: It’s funny how the sense of being alone only seems to emerge in the presence of other people. Who feels lonely when out in the country, in the great outdoors? Solitude is an urban extravagance!

01

一夜限りのアートの祭典

六本木アートナイト2014
「動け、カラダ！」

One Night Only!

Roppongi Art Night 2014

"Move Your Body!"



六本木アートナイト2014メインビジュアル

昨年、延べ83万人が参加した「六本木アートナイト2013」。「六本木アートナイト」は、生活の中でアートを楽しむという新しいライフスタイルの提案と、大都市東京における街づくりの先駆的なモデル創出を目的に、2009年より開催されている一夜限りのアートの饗宴だ。2014年の開催テーマは、『動け、カラダ!』に決定。アーティスティックディレクター日比野克彦氏の関心事のひとつである「アートの持つ身体性」という側面に目を向け、多様なプログラムが展開される。市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開するアーティストの西尾美也氏が、『カラダひとつプロジェクト』と題した、古着を使った巨大なパッチワーク作品を制作。六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館などで展開される予定。また、六本木の街の中で行われるダンスパフォーマンスを取り入れた「六本木パレード〈ふわりたい ながれたい つなぎたい〉」の総監修を務めるのは、伊藤康氏。オールナイトで六本木の街中がアートで彩られる祭典に今年も期待が高まる。

Last year, some 830,000 people visited "Roppongi Art Night 2013", a one-night only art festival started in 2009 to present ideas on new lifestyles placing the enjoyment of art at the center of everyday life and to create cutting edge examples of urban development in the great metropolis of Tokyo. For 2014 Artistic Director Katsuhiko Hibino has taken one of his areas of interest, the physicality of art, and incorporated it under the theme "Move Your Body!" The Art Night will present a number of programs following this theme. Yoshinari Nishino, whose projects bring together students, citizens, and others both in Japan and abroad, will creat giant patchwork art objects made from secondhand clothing with public. This "One Body" Project will take place at such locations as Roppongi Hills, Tokyo Midtown, and the National Art Center, Tokyo. With public-participation parades and performances throughout the district with Kim Itoh's supervision, hopes are high again this year for this night-long festival of art in Roppongi.

会期： 平成26(2014)年4月19日(土) 10:00~4月20日(日) 18:00
 〈コアタイム〉4月19日(土) 18:17【日没】~4月20日(日) 5:03
 【日の出】※コアタイムはメインとなるインスタレーションやイベントが集積する時間帯です。
 会場： 六本木ヒルズ、森美術館、東京ミッドタウン、サントリー美術館、21_21 DESIGN SIGHT、国立新美術館、六本木商店街、その他六本木地区の協力施設や公共スペース
 入場料： 無料(但し、一部のプログラムおよび美術館企画展は有料)
 問い合わせ： 03-5777-8600 (ハローダイヤル、営業時間：年中無休8:00~22:00)
 主催： 東京都、アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、六本木アートナイト実行委員会【国立新美術館、サントリー美術館、東京ミッドタウン、21_21 DESIGN SIGHT、森美術館、森ビル、六本木商店街振興組合(五十音順)】
 オフィシャルサイト：<http://www.roppongiartnight.com>

Date & Time: 10:00 4. 19 (Sat) – 18:00 4. 20 (Sun), 2014
 "Core Time": 18:17 (Sunset) 4. 19 (Sat) – 5:03 (Sunrise) 4. 20, 2014
 (Principal installations and events take place during "Core Time")
 Venue: Roppongi Hills, Mori Art Museum, Tokyo Midtown, Suntory Museum of Art, 21_21 DESIGN SIGHT, National Art Center, Tokyo; Roppongi shopping streets, other facilities and locations in Roppongi area.
 Admission: Free (some programs and exhibitions are subject to fees)
 Information: 03-5777-8600 ("Hello Dial" Information number; 8:00-22:00)
 Organizers: Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo/ Tokyo Culture Creation Project Office (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Roppongi Art Night Executive Committee [Mori Art Museum, MORI Building Co., Ltd., the National Art Center, Tokyo, ROPPONGI Shopping Street Association, Suntory Museum of Art, Tokyo Midtown, 21_21 DESIGN SIGHT] (in alphabetical order)
 Official Site: <http://www.roppongiartnight.com/en>

ブンプロ 掲示板

お馴染み、研究所内にある掲示板には、
 ブンプロが主催する平成26(2014)年4、5月の
 レコメンドイベント情報が届きました!

The latest on Bunpro Recommended Events
 for April and May 2014 from the Good Ol' Lab Bulletin Board



このほかのプログラムや最新情報は、
 東京文化発信プロジェクト
 公式ウェブサイトをはじめ、
 公式 facebook や twitter でご覧ください。
www.bh-project.jp

For the latest information on other programs,
 visit the official web site,
 official Facebook page, or Twitter page.

www.bh-project.jp/en



02

海外から一流の劇団を招聘

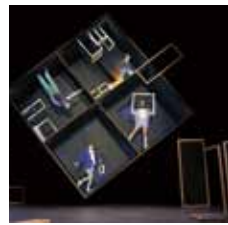
親子で楽しめる、
TACT / FESTIVAL 2014

Top International Performance Group Invited to Japan
 Fun for Kids and Parents
 TACT/FESTIVAL 2014



フランス発ヌーヴォー・シルク
 (新しい形のサーカス)の最前線!
 カミーユ・ボワテル
 「リメディアア〜いま、ここで」

Cutting-edge "Nouveau Cirque" from France
 Camille Boitel
 "L'immédiat: Here, Now"



スイスのアーティスト・ユニットの最新作
 ズィメルマン エド・ペロ
 「ハンスはハイリ
 〜どっちもどっち?!」

New Work by Swiss Artist Duo
 Zimmerman & de Perrot
 "Hans was Heiri"

昨年6月、東京芸術劇場での「シュフ ウシュフ」が話題となった、スイスの二人組アーティスト・ユニット、ズィメルマン エド・ペロが最新作をひっさげて再来日。「ハンスはハイリ」とは「似たり寄ったり」という意味。人は特別な存在になろうと努力するが、実際は驚くほど誰かと似ているのかも……。二人とサーカス・アーティストやダンサーたち七人が、回転する巨大な箱で繰り広げる、アクロバティックなパフォーマンスに注目。

Zimmerman & de Perrot, the Swiss artist duo whose "Chouf Ouchouf" ("Look, but take a real good look!") was a sensation at the Tokyo Metropolitan Theatre in June last year, are back in Japan with their latest work "Hans was Heiri" (means "much the same"). The more one struggles to be unique, the more one may be brought closer to someone else. The two artists are joined by seven circus performers and dancers in an acrobatic show that takes place in a giant revolving box.

フランスで話題を集める「ヌーヴォー・シルク」。ロンドンのバービカン・センターなどでも絶賛を浴びた注目作「リメディアア」が初来日。廃品置き場のような舞台上。ガラクタの上を、下を、すき間を演者が動き回ると、家具が倒れ、壁は崩れ、本からはページが抜け落ちる。本作品はフランスの国際マイムフェスティバル「MIMOS」で最優秀賞を受賞し、カミーユ・ボワテルと5人の演者が生み出す、スピード感あふれるコミカルな作品だ。

"Nouveau Cirque" ("Contemporary Circus") is a style of entertainment that is currently popular in France. "L'immédiat," one of the most highly renowned companies, now pays its first visit to Japan. The performers move above, under, and through junk and bric-a-brac piled high on the stage, knocking over furniture, battering down walls, and ripping pages from books in a high-speed comic performance. Featuring award-winning mime Camille Boitel and five other performers, "L'immédiat" was awarded the Prix Mimos in 2010.

会期： 「リメディアア〜いま、ここで」平成26(2014)年5月3日(土)~6日(火)
 「ハンスはハイリ〜どっちもどっち?!」平成26年5月9日(金)~11日(日)
 会場： 東京芸術劇場 プレイハウス
 料金： 両演目とも3,000円(大人)、1,000円(高校生以下)、2演目セット券あり(セット券は東京芸術劇場ボックスオフィスにて前売のみ取扱い)
 問い合わせ： 0570-010-296(休館日を除く10:00~19:00)
 東京芸術劇場ボックスオフィス
 主催： 東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)東京都／東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

Dates & Times: "L'immédiat: Here, Now" 5. 3 (Sat) – 5. 6 (Tue), 2014
 "Hans was Heiri" 5. 9 (Fri) – 5. 11 (Sun), 2014
 Venue: Tokyo Metropolitan Theatre Playhouse
 Admission: ¥3,000 (adults), ¥1,000 (high school students and under), Set tickets for both performances available at Tokyo Metropolitan Theatre Box Office. (advance sales only)
 Information: Tokyo Metropolitan Theatre Box Office, 0570-010-296 (10:00-19:00 on days of theatre operation)
 Organizers: Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Tokyo Metropolitan Government, Tokyo Culture Creation Project Office (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)

アートプロジェクトの
書籍プレゼント!春眠いる
場合じゃナイ!?

5冊



3冊

地域や市民が参画するアートプロジェクトを通じて東京の様々な魅力を創造・発信している「東京アートポイント計画」のプロジェクト書籍をプレゼント!

(右)「アートプロジェクト」大学、オルタナティブな場、被災地など、さまざまな実践現場からこれからのアートと社会の姿を探る。

(左)「戯曲」東京の条件」劇作家岸井大輔が代表を務める一般社団法人PLAYWORKSと共に3年にわたり上演した演劇作品。

【応募方法】

ご希望の方は、①氏名 ②住所 ③性別 ④年齢 ⑤職業 ⑥電話番号 ⑦希望の書籍
 ⑧本紙に対する意見・感想、以上全てを明記のうえ、件名を「書籍プレゼント」としてFAXまたはメールにてご応募ください。
 FAX: 03-5638-8811
 E-mail: present@bh-project.jp
 応募締切: 平成26年4月30日(水)

※当選結果は、書籍の発送をもって代えさせていただきます。※ご記載いただいた個人情報は、応募に対する当選結果及び個人を特定しない各種統計処理のためのデータとしてのみ利用します。

Research Topic (4)

Unlocking Children's Sensibilities through Art

研究テーマ④

アートを通じて、
子供たちの感性をひらく

日本に古くから伝わる伝統芸能、そしてあらゆる音と触れ合う音楽体験。
アートと子供が出合い、交わるとき、
一体どんな化学反応が生まれるのでしょうか。
ふたつのプログラムを追いました。

Japan's traditional performing arts and musical experiences that
bring children into contact with all sorts of sounds.
What kind of chemical reaction occurs when children encounter and
become involved with art? We followed up on two programs.



「大鼓を打った後は、調律をきちんと
巻きましよう」と置き方も教わる。



小鼓の譜面を脇に置きながらの演奏。
子供たちは見慣れない譜面に少し苦戦。



列になり、先頭の子供が演奏。他の子供
は譜面を見ながら手の動きでリズムをとる。



稽古のはじまりは挨拶から。講師に
向ける子供の眼差しは真剣そのもの。



じかに手で革を打つ小鼓や大鼓と異なり、
太鼓は2本のバチでリズムを刻む。



講師は子供たちを一人ひとり褒め、
改善すべき点もまたしっかり指摘する。



狂言では習ったことをひとりずつ実践。
緊張しつつも、腹から声を出す。

キッズ伝統芸能体験発表会

ブンブロの『東京発・伝統WA感動』事業の一貫として実施している体験プログラム。能楽のほか、長唄、三曲、日本舞踊のブロの実演家が7か月にわたり子供たちを指導する。稽古の集大成として、3月21日(金・祝)に宝生能楽堂、27日(木)、28日(金)に浅草公会堂にて発表会を開催。発表会の詳細やこれまでの様子はHPで確認できる。
<http://www.geidankyo.or.jp/kids-dento/>

※現在、観覧のお申し込みは終了していますが、追加観覧のご案内をしている場合があります。詳しくはHPをご覧ください。

case

01

東京発・伝統WA感動 キッズ伝統芸能体験

プロの実演家が子供たちに伝統芸能を指導するプログラム
「キッズ伝統芸能体験」。「本物」の環境で日本に受け継がれてきた文化に触れることにより、新しい感性がひらく。

凜とした空間の中で、緊張感を持って稽古に励む子供たち。仕舞や狂言を教わる者は腹から声を出し、楽器に触れる者は臆することなく鼓を打ち笛を吹く。7か月のプログラムの半分の段階でこのクオリティか、と思うほど佇まいが美しい。

「子供たちは吸収が早い。稽古の度に何かを要求しても、きちんと応えてくれます。お家で、あるいは稽古場に通うバスの中などで復習しているのですが、生活の中で伝統芸能に触れる時間を少しでも取ってもらえるのはありがたいことです」と、小鼓を教える大村華由先生は話す。このプロジェクトのキーワードは「感性の涵養」。伝統芸能を理屈で教えるのではなく、体に染み込ませることで豊かな感性を育

てるのが狙いだ。そのためにプロの実演家に指導をお願いし、通常足を踏み入れる機会の少ない宝生能楽堂にて、人や場所が持つ空気を感じながら稽古を受けてもらうことも大切にしている。本物に触れる中で、伝統芸能に対する楽しさや「できる」嬉しさなどを感じられるからこそ、彼らも熱心に通い成長の跡を見せているのだ。「伝統芸能は、現代において多様な文化の中のひとつ。同時にこの国にしかないかけがえのないものだからこそ、子供たちに伝えていく努力が必要です」と『キッズ伝統芸能体験』事務局の川島香さんは話す。日本の伝統を継承することだけでなく、それを通じて広がる興味や好奇心も、子供たちが進む道に新たな風を吹き込むはず。

Amid a dignified atmosphere, children are practicing intently, their concentration evident. Some, learning the *Shimai* dances and *Kyogen* comic plays that feature in Noh theater, speak in resonant voices that emerge from deep within their chests, while others beat *Tsuzumi* drums and blow *Fue* flutes without betraying the slightest trace of nervousness. Not a single child was looking around or chatting. Their posture was so beautiful that one wondered whether this could really be the result of the first half of a program lasting just seven months.

"They probably go over it again at home or on the bus on the way here, but I'm grateful that they're being given the opportunity to come into contact with traditional performing arts in their everyday lives, if only for a short time."

That is the view of *Kotsuzumi* teacher Kayu Omura. The key phrase in this project is "cultivating sensibility". Rather than teaching them the theory of traditional performing arts, it aims to cultivate a rich sensibility through immersing them in such arts. That is why the project attaches great importance to having a group of professional instructors teach the children in a proper Noh theater (a place that the children would not often have the chance to visit), so that they could soak up the atmosphere of the people and the space while they practiced. The children attended these practices so enthusiastically precisely because they were able to experience the pleasure to be gained from the traditional performing arts and the joy of being able to do something, while coming into contact with the real thing, and traces of this can be seen in their development. "Traditional performing arts are one of many diverse forms of culture in the modern world. At the same time, they are something irreplaceable in this country. So that I think we have to make the effort to teach them children." So says Kaoru Kawashima from the Secretariat of the Traditional Performing Arts for Kids. Passing on Japanese traditions – not to mention the wide range of interests and curiosity that arise from this – should breathe new life into the paths that children subsequently follow.



美しい姿勢を保ちながら踊るのは、
想像以上に筋力を使う。



仕舞の練習に励む子供たち。
能楽堂の舞台に立てる、贅沢な時間。



姿勢を正し、練習に取り組む子供たちの姿が凛々しい。



子供たちによる笛の音色が心地よく響く。
音楽として成立し始めていた。



Music Weeks in TOKYO 2013

ミュージック・エデュケーション・プログラム 国際連携企画〜カーザ・ダ・ムジカ〜

2月8日(土)、9日(日)、東京文化会館と文京シビックセンターで子供からファミリーまでを対象とした様々なワークショップが開催された。音楽を通じて育む心とは?

音楽は鑑賞するだけでなく、参加すればもっと楽しい。しかし日本では、そのきっかけになるワークショップがまだ盛んではない。そこで来日したのが、ポルトガルで質の高いエデュケーション・プログラムを実施する音楽施設『カーザ・ダ・ムジカ』のプログラム・コーディネーター、ジョルジュ・プレンドラス氏。ワークショップ・リーダーのパウロ・ネート氏とジョルジュ・ケイジョ氏も共に訪れ、本国で行っているワークショップを子供たちとその家族に向けて実践するとともに、彼らと同じリーダーを目指す者たちに向けての育成プログラムを行った。

ネート氏とケイジョ氏によるワークショップの切り口は様々だ。手を叩いたり飛び跳ねたりして展開するものから、コオ

ロギやコックなどのキャラクターを演じながら進めるものもある。その時々で身体やキッチン用品、楽器を鳴らし、リズムとメロディに乗せて参加者を刺激。ポルトガル人の彼らが、アイコンタクトと声や体の動きだけで子供たちを惹き付ける様は圧巻だ。

『カーザ・ダ・ムジカ』メンバーの指導のもと、昨年12月からワークショップを創作。この日いよいよ本番を迎え、子供たちに披露した結果、活き活きとした反応を目の当たりにしたワークショップ・リーダー育成プログラムの受講生もまた、音楽の楽しさを再確認していたようだ。体感することで生まれる高揚感。音楽への関わり方が増えることで、その後の人生はより濃密になるだろう。

Appreciating music is enjoyable, but taking part is much more fun. However, there are not many workshops in Japan that offer opportunities for this. So Jorge Prendas, Education Program Coordinator at Casa da Música, a theater that runs excellent education programs in Portugal, visited Japan to pass on his know-how. Workshop leaders Paulo Neto and Jorge Queijo also came over and held workshops for children and their families, like the ones they run in their home country, and also led a program aimed at cultivating the skills of those who wish to become leaders like them. The approaches adopted by Paulo and Jorge in their workshops vary. In some, they clap their hands and leap around the room, while in others, they play the parts of characters such as crickets and roosters. Sometimes using their bodies or kitchen implements to make sounds, and other times playing musical instruments, they immerse themselves in the rhythms and melodies, inspiring a response from participants. It is incredible to see how these Portuguese performers captivate the children using only eye contact, their voices, and movement. Under the guidance of the members of Casa da Música, participants in the workshop leader training program began to hold workshops in December last year. Having seen for themselves the lively response that their presentations evoked in the participating children, it seemed that these aspiring workshop leaders also experienced anew the pleasure of music. The physical sensation gives rise to a feeling of euphoria. Just increasing the ways in which one interacts with music is likely to make one's subsequent life much richer.



Music Weeks in TOKYO 2013 ミュージック・エデュケーション・プログラム 国際連携企画 〜カーザ・ダ・ムジカ〜

ワークショップを通じて音楽や芸術への関心を高めながら、自己表現力やコミュニケーション力を養い、豊かな心を育てることを目的とした取り組み。初年度となる今年は、ポルトガルの音楽施設『カーザ・ダ・ムジカ』と連携して行われた。また、ワークショップ・リーダー育成プログラム受講生の中から最優秀と認められた受講生は、研修生として『カーザ・ダ・ムジカ』に1週間派遣される。

Where the master does his work

あのひとの現場

井上大輔のワークショップ
Daisuke Inoue Workshop

井上大輔／Daisuke Inoue
舞踊家。自身のソロ活動などを経て、現在はダンスカンパニー『21世紀ゲバゲバ舞踊団』代表としてワークショップやダンスの創作、発表など精力的に活動中。横浜ダンスコレクションEX 2014コンペティションIにて奨励賞受賞。http://gebageba21.com/



私は舞踊家なので、どこが現場かと聞かれたら一番わかりやすいのは劇場と稽古場です。しかし最近は一般の方向けにダンスのワークショップも意欲的に行っていますので、例えばその対象が小中学生なら教育機関なども現場ということになります。さらに私にとっては、移動も現場と言えるかもしれません。移動中に稽古やワークショップのことを考えたりしていますから。私が舞踊家の活動と並行してワークショップを始めたのは、最近のこと。自分の出身大学で開催された、ワークショップリーダーの養成講座で学んだことがきっかけです。港区で行っているワークショップでは、参加者同士が自己紹介をしながら相手を知り、一緒に体を動かす時間を大切にしています。体で何かを表現することは、元を辿ると日常の動作そのもの。話をする時に手を使ったり、聞く時にうなずいたり。だからこのワークショップでは「踊りを作る」意識ではなく、参加者が自然と「踊っているな」と気付ける時間を作りたいと思っています。そのためには私がどれだけ参加者の特性に気付いて、それを身体表現に活かせるかが大切。さらに彼らがワークショップを通じて何を感じたか、そこから生まれた動作を通じて観客にそれがどう伝わるか。それこそが表現であり、ダンスの可能性です。ちなみに私は人と対話をしながら作品を作るタイプだと、ワークショップを通じて気付きました。『21世紀ゲバゲバ舞踊団』でも、メンバーと対話しながら生まれてくるものを表現したいと考えています。最初はぶつかることも多かったのですが、今はお互いの差異も含めた上で話ができるようになりました。人は違って当たり前。その差異を越えた先での対話の中で、創作を続けていきたいです。

As a dancer, when I am asked where I work the simplest answer is “theaters and rehearsal halls.” Lately, though, I’ve also been holding dance workshops for the general public, and if I’m teaching elementary school students then I also work at schools. You might also say I work on the move, as I spend so much of my time in transit thinking about rehearsals and workshops. I only began conducting workshops alongside my dance activities recently, inspired by what I learned at a training course for workshop leaders held at my alma mater. At the workshops now underway in Minato City, I take care that participants get to know each other by introducing themselves and spending time moving their bodies together. To express oneself physically is, at the most basic, a matter of everyday gestures, like using the hands when speaking or nodding when listening. During workshops, therefore, rather than having participants focus on choreographing a dance, I try to create moments when they suddenly come to the realization that they’re dancing. To do this, it is important that I take note of participants’ characteristics and find ways to utilize them in physical expression. What participants feel in the course of the workshop is also important, as is how the movements they create convey those feelings to an audience. This is the essence of expression, and the potential of dance. The workshops, by the way, have made me realize that I’m the sort of person who creates through dialogue with others. For the dance troupe “21st Century GEBA GEBA”, then, I have hoped to express things born through dialogue with other group members. At first there was often conflict, it is only natural that people are different, but I hope to continue creating, through dialogue, in a space just beyond such differences.

「ゲバゲバキッズ・トーキョー野方〜結成！ 21世紀コドモ舞踊団 2014 春〜」
3月30日（日）14時〜 野方区民ホール（中野区）にて小学3〜6年生の子供たちと創作したダンス公演を上演予定。（問い合わせ・申込）NPO法人 芸術家と子どもたち TEL：03-5961-5737

Tokyo Creative / Nameko Shinsan

トーキョークリエイティブ

文：辛酸なめ子



辛酸なめ子／Nameko Shinsan
東京生まれ。漫画家、コラムニスト。巫女的な感性であらゆる事象を取材しまくる驚異のフィールドワーカーとして知られる。著書は『辛酸なめ子の現代社会学』（幻冬舎）、「女子校育ち」（筑摩書房）「セレブマニア」（ぶんか社）など多数。

「六本木イニシエーション」
六本木ヒルズがオープンしてもう十年以上経ったとは……自分も年を取るはず。はじめて行った時は、迷路のような通路に方向感覚を失い、キラキラ輝く森タワーの野望オーラにしり込み、手の届かない価格帯のお店にアウェイ感を覚えました。野望や欲望、様々な念が渦巻くタワーはバベルの塔のようで、畏れ多い気持ちに……。埼玉で育った私にとって、六本木ヒルズは東京の象徴。イニシエーションのように様々な試練を授けてくれます。
何度か訪れるうちに、試練の印象はなくなり、六本木ヒルズは卑屈な女にも優しく、坂本龍一の心地よい音楽や、村上隆のキュートなキャラクターでフレンドリーに迎えてくれました。いつしか森美術館に引き寄せられ、小沢剛展を皮切りに足繁く通うようになりました。東京で最もおしゃれな男女が集う森美術館。他のお客のファッションに触発され、階下のセレクトショップなどで散財。お金がなくなると、よく地下の休憩スペースでデリで買ったお弁当を食べたものです。上の階のレストランとの格差感に、ルサンチマンを募らせ、仕事の原動力にしていました。六本木ヒルズはテナントが頻繁にリフレッシュします。新陳代謝をしていて有機的な流線型の六本木ヒルズはひとつの生命体のよう。同じ東京の住人だと思いうと親近感がわいてきます。

"Roppongi Initiation"

Has it really been more than a decade since Roppongi Hills opened? No wonder I feel old. The first time I went there I lost all sense of direction in its maze-like corridors, recoiled at the aura of ambition reflected in the glittering Mori Tower, and felt out of place among shops selling items priced well out of reach. Swirling with aspiration and desire like the Tower of Babel, it was an awe-inspiring sight. Having been raised in Saitama, for me Roppongi Hills was a symbol of Tokyo, and has been something of a rite of passage for me. After a number of visits, the sense of being tested faded and I found that Roppongi Hills offered a friendly welcome even to an unassuming woman such as myself, always greeting me with the refreshing music of Ryuichi Sakamoto and the cute mascot characters of Takashi Murakami. I was soon drawn to the Mori Museum, where the most fashionable men and women in Tokyo gather, and have visited regularly ever since the Tsuyoshi Ozawa exhibition. Inspired by the way other visitors dressed, I often squandered my money at the boutiques on the lower floors. When my wallet was empty I ate deli take-out in the underground lounge, my resentment about the disparity with the upper-floor restaurants providing fuel for my own work. Tenants at Roppongi Hills are constantly changing in a kind of metabolic renewal; organic and streamlined, Roppongi Hills is a living thing. To think that as a resident of Tokyo I share the same city conjures a sense of affinity.

Editor's Note

編集後記



2月8日（土）、真っ白い世界に覆われた東京。テレビをつけるとどのチャンネルも大雪による交通機関の混乱を報道していた。ワークショップ（P7）は中止かもしれない。一瞬頭をよぎったけれど、予定通り開催との知らせが届き、東京文化会館に向かった。この悪天候のなか、どれだけ人は集まるのだろうか？と不安を抱えながら。ところが会場の温度は予想に反して高かった。ワークショップに期待を寄せる親の情熱、子供の無邪気な好奇心が会場に充満している。誰かの意志をちゃんと感じられる場所は、気持ち良い。その光景を見ながら、今日はこの街、この場所が自分の居場所だと実感した。街という単位は大きいけれど、その中身はそれぞれ多様な自分たち。街の主語は、あくまで自分なのだ。

About Tokyo Culture Creation Project

東京文化発信プロジェクトとは

東京文化発信プロジェクトは「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施している事業です。多くの人々が文化に主体的に関わる環境を整えるとともに、フェスティバルをはじめ多彩なプログラムを通じて、新たな東京文化を創造し世界に発信していきます。

Tokyo Culture Creation Project, organized by the Tokyo Metropolitan Government and the Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture in cooperation with arts organizations and NPOs, aims to establish Tokyo as a city of global cultural creativity. The project facilitates involvement of a larger number of people in creation of new culture as well as it creates and globally disseminates new Tokyo culture through organizing international festivals and other diverse events.

www.bh-project.jp

www.bh-project.jp/en

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階 tel：03-5638-8800 | fax：03-5638-8811